
桜の季節に

夕菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の季節に

【著者名】

N4431R

【作者名】

夕菜

【あらすじ】

出会いを知らない女の子の物語。

春は、出会いと別れの季節だと聞いたことがある。

私は木の幹に背中を預け、空を仰ぐ。空からは、ひらりひらりと花びらが舞い落ちてきた。

それは・・・桜の花びらだ。いや、正確に言えば、これは私自身。・・・私は、この桜の木と共に生きる者。だから、この花びらがすべて散つたとき、私は消える。何も残さずに、すべてを忘れて、消えてしまう。

だから、私にとつて、春、という季節は別れの季節。出会いなんてないし、望んでもいない。だって、出会いがあつてもすぐに別れがくる。ただ、哀しいだけ。

私の桜の木があるのは、小川のふち。他に、桜の木はなく、私の木だけが「ここにいるよ」と主張しているように、春という季節がくると、溢れんばかりの花を咲かす。

それは、どこの桜の木よりも美しいらしく、私の近くには人がたくさん集まる。

そんなある日。

私はいつものように、桜の木に背中を預け、私の近くに集まつた人々のことをぼーっと眺めていた。

(楽しそうだな。この人たち・・・)

人々は、人ではない、私の存在に気付くはずもなく、それでお弁当やお菓子を囲んで楽しそうに過ごしている。家族や友人、恋人、同時・・・。きっと、みんなそんな関係だ。だから、あんなに楽ししそうなんだ。

「ねえ。何してるの?」

「!」

不意に声をかけられた。

振り返ると、そこには黒髪の少年が一人。

「・・・君、一人なの？友だちとか一緒にじゃないの？」

少年は、休む暇なくまた私に問いかける。

「うん。私は一人」

（この子、私のことが見えるんだ！）

私は、そんなことを思いながらも、それを感じさせないように落

ち着いた声で言った。

今まで、人に声を掛けられたことなんてない。だから、嬉しかった。でも、私が人じやない、とばれてしまったら、きっとこの子は離れていく。

だから、普通の人のふりをした。

「親たちは、僕の知らない話で盛り上がってるし、僕、暇なんだよ。ねえ。一緒に遊ぼうよ」

「・・・うん！私も丁度、退屈してたところだつたの」

私が伏せ目がちにそう言うと、少年は一コリと微笑んだ。

「んじや、何して遊ぼうか？」

私は、気付いていなかつた。彼と出会つてしまつたことに。出会いの次に必ず訪れる“あのことは”知つていたはずなのに。

何で、気付かなかつたんだろう。何で忘れていたのだろう。

・・・ああ。そうか。私は誰かと出会つたことがないから、本当の別れを知らなかつた。ただ、それだけだつたんだ。

私たちは、その日、日が暮れて、周りの人々が家に帰つて行くまで遊んだ。

小川に泳ぐ魚を見つけたり、地面にらくがきしたり・・・。それらは、私にとつて空っぽの心が一杯になるほど、楽しい遊びだつた。きっとそれは、少年が楽しそうに笑つていたからだと思う。だから、私も心の底から楽しいと思うことができた。

次の日も、また次の日も、少年は私のところまで来てくれた。

「ここを、待ち合わせ場所に決めて、決まつたように毎日、この桜の木の周辺で遊んでいた。

（・・・なんで、他の場所に行こうって言わないんだろう？）

私は、それだけが疑問だった。だって毎日同じ場所で遊んでいたら、退屈しちゃうでしょ。

でも、私は、この桜の木と一緒に生きる者。だから、ここを離れることはできない。だから、違う場所に行つて遊ぼう！と言われたとき、何て答えるか考えていた。

彼を傷つけないよう、断るにはどうしたらいいんだろうって・・・。

でも、彼はそんなこと、気にする素振りも見せなかつた。

・・・そして。雨が降つた。

その雨は、夜中になるにつれ激しくなり、私の頬に打ちつける雨も強く、痛く、なつてきた。

「そうか・・・」

私は、もう消えるんだ。そして、すべてを忘れてしまうんだ。桜の花びらは、この雨のせいでの、地面に落ち鮮やかさを失つた。春が終わりを告げる頃の大雨。どうやら、桜の花たちはもう限界だつたらしい。

私は、気付いていなかつた。彼と出合つてしまつたことに。出合つたの後に必ず訪れる“のこと”は、知つていたはずなのに。何で、気付かなかつたんだろう。何で忘れていたのだろう。

・・・ああ。そうか。私は誰かと出会つたことがないから、本当の別れを知らなかつた。ただ、それだけだつたんだ。

私は、いつもそうしていつに木の幹に背中を預けて、空を仰いだ。

空は、もちろん灰色で。他に何もなかつた。だから、泣いていて

もなんの問題もない。

（・・・なんで、人となんか出会っちゃたんだら？）
ものすごく後悔した。

あの少年と出会っていなければ、出会っていても相手にしなければ、こんなにも哀しくて、辛くて、悔しい思いをすることなんてなかつたのに。

「はあ・・・・・」

溜息をだしても、この胸の奥にある重い鉛はなくならなかつた。私はそつと目を閉じる。

・・・もうすぐで、全でが終わつて消えるんだ。

その時、雨の音に混じつて、人の足音が聞こえてきた。

私はそつと目を開ける。

そこには、傘をさしたあの少年の姿があつた。

「・・・来てくれたんだ」

私の声は、雨の音にかき消されそつた。
来てくれた、でも、もうすべてが終わる。

「また、来年、ハルノに会いに行くから」

少年は、唇をギュッと閉じて、私のことを見据えた。

「え・・・？」

「去年、名前教えてくれただろ。それに、ハルノが人じやないって
ことも」

「つ・・・そう・・・だつたんだ・・・！」

私は、桜がすべて散ると同時に消える、そして、すべてを忘れ
る。

少年は、私のことを見据えたまま、哀しそうに微笑んだ。

彼は、去年、私が人じやないつてことも、桜が散つてしまつて消
えるつてことも知つたんだ。私と彼は、去年、出会つていた。

ただ、私がすべてを忘れていただけ。

「私、あなたの名前、忘れちゃった・・・・・」

大切なことだつたのに。私だけ、が忘れていた。

私が目を伏せると、彼は私の手を引いた。そして、木の後ろに回り込み「大丈夫」と言つて、木の幹を指さした。

「・・・」

そこの幹には不器用な文字で「ショウ」と彫られていた。「ショウ・・・。これがあなたの名前なの？・・・これ、私が彫つたの？」

「そう。去年、忘れないようにってハルノが彫つてた」

彼 ショウは、ニッコリと笑つた。

私は、その文字にそつと手を触れる。

そして、確かに知ることができた。去年も、私は、『』でショウと出会つていた。

きつとそれは、今年もそうだったように、楽しくて、大切な時間だつたんだ。

「・・・」

私は思つた。

そうか。すべてが消えて無くなつたわけじゃない。

ショウは確かに私のことを覚えてくれていた。ショウが、『』にして、私が笑顔の時間を過ごすことができたのも、去年の時間があつたからなんだ。

・・・そのとき、最後の桜の花びらがヒラリと舞い落ちた。

「また、会いに行くから！」

「・・・ありがとう。ショウ」

私は、ポロリと涙をこぼして笑つた。

出会わなければよかつた・・・そんなの間違つていた。こんな暖かな気持ちでいられるのも、この出会いのお陰なんだね。

今度はちゃんと覚えていいますよ。私は、今までにないくらい強く強く願つた。願うことができた。

少女からこぼれた涙は、一枚の桜の花びらに変わる。それと同時に、突然やつてきたやわらかな風に、少女の姿はかき消された。

・・・その花びらは差し出された少年の掌にフワリと舞い落ちる。

そして、今年の春は終わつた。
・・・・また来年に花を咲かせるために。

end.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4431r/>

桜の季節に

2011年3月7日17時40分発行